

国語科（書くこと）の指導と評価

— 「ニュースを書こう」の実践を通して —

伊藤 福男

1. 個を生かす授業の構成と評価

(1) 国語科「書くこと」の指導について

私達は、日々の生活の中で様々なことを体験し、喜んだり、悲しんだりいろいろな思いを持って暮らしている。そして、楽しかったこと、悲しかったことを家族や友達先生と相手は様々であるが、いつしか自分の思いを伝え合っている。自分の体験を日記に綴って自分の記録としてとどめておくこともあるが、手紙や作文という形で第三者に伝えるなど自分の体験を他者と共有することで人とのかかわりを深めている。

本学級の児童も、学校であったことを家庭で話したり、家庭であったことを学校で話すことが大好きである。休みあけの登校日には、「昨日は、スーパーにいった。ゲームした。」と自分から話してくるので、「誰といったの。どんなゲーム。」と聞き返すと、話は益々活発になってくることも少なくない。話すことは、活発な児童だが、日記など書くことになると、書いてこなかったり、「○ ○しました。」の一文が書いてあることが多い。

本学級の児童が、ひらがなの50音が読めて書ける段階で文を書く時の問題は、自分の話したことをすぐに文字化することがむづかしい、文字を確かめて声を出して書いていると声を出すことに集中して脱字をしてしまうなどがあげられる。そこで、まず、毎日の生活の中から題材を選び、文を書く前に児童が何でも積極的に話せる環境づくりが大切である。そして、児童が話したことを児童と一緒に確認しながら、一文字ずつを書いて文に仕上げていくことが、重要であると考えられる。国語科「書くこと」の指導において身近な題材を選び、児童が自分の生活を生き生きと表現することをめざし、書く力を育成したい。

(2) 自己を高める評価力の育成

毎日の日記を書いたり、学習活動のあとに何をしたかを思い出して文章に書くことは、自分の行動を振り返ることである。例えば、みかん狩りのあと「みかん狩りにいった。みかんを一杯たべた。」と、行動を振り返ってみる。振り返りながら、「今度は、お母さんと行きたい。」と思った時、それは単に行事を振り返ったのではなく、次のやってみようという意欲へと繋がっている。お母さんと行くため、その児童は、「みかん狩りに行こう。」と家でお母さんに言うであろう。また、テレビの画面に船が出たのを見て、「みかん。」とみかん狩りに行った船を思い出す児童もいるだろう。この児童の場合、テレビの映像の船をただ船とみるだけでなくみかん狩りに行った過去の経験と結びつけて表現することができたのである。

自分の行動を振り返ることにより、新たな行動に繋がっていくのである。このようにして行動が拡大していくことは、自己が高まっていくことであり、評価力も育成されていくものと考えられる。

3. 指導事例

(1) 指導内容「書くこと」

書く指導は、総合学習の各単元や学校行事に関連づけて年間を通して指導を行った。即ち、各単元の学習の後、学校行事後の国語の時間に「学習したことを思い出して書こう。」と設定した。1学期は、「宿泊学習のこと」と総合学習の単元名を題材名としたが、2学期からは、「ニュースを書

こう」と題材名を変えて行った。また、毎日の日記を宿題にして毎朝みんなの前で発表する時間を設け、書く指導の一つとした。

総合学習は、従来ある生活単元学習、学級行事を検討、再構成し、総合学習として展開している（初等教育53号参照）

総合学習の各単元や学校行事は、いずれも児童にとって、とても興味をもって一人一人が楽しく活動する内容であり、学習したあと振り返って自発的に書きやすいと考え、「書くこと」の題材に設定して指導を行った。

(2) 児童の実態

本学級の読み書きに関する実態と課題は、次の通りである。

	実 態	課 題
⑦	50音の読み書きができ、仮書を試写することができる。毎日の日記は、「〇〇しました。」の一文で同じことを書くことがおおい。	学校や家での出来事を思い出して話し、それを文章化してひとりで書くことができるようになる。
⑧	50音は読め、自分の名前を書くことができる。正確に書けない文字もあり、マスの横の手本を見て、大人の言葉かけとともに書くことができる。	学校や家で遊んだ事を思い出して話し、それを文章化した手本を見て書くことにより、書くことに意欲を持つようになる。
⑨	50音は読め、自分の名前を書くことができる。鏡文字になる文字もあり、日記は、マスの横の手本をみながら書くことができる。	学校や家で遊んだ事とその時の様子を思い出して話し、文章化したものを手本を見ながら書くことができるようになる。
⑩	一年生程度の漢字が読め、ある程度書ける。書くことに積極的であるが、あせって書きため字が脱落することがある。	生活の中の出来事とその時の自分の気持ちを思い出して文章化して字が脱落しないように丁寧に書くことができるようになる。

(3) 指導目標

- ① 学習活動を振り返り、自分の活動を話すことができるようにさせる。
- ② 話したことを文章にして書くことができるようにさせる。
- ③ 誤字、脱字のないように書くことができるようにさせる。

(4) 指導計画

① 指導の年間計画と題材と時間数

月	題 材 名	時間数
5月	「バス車庫見学のことを〇〇先生に書こう。」	2
6月	「A先生にてがみを書こう。」「宿泊学習のことを書こう。」	4
9月	「お月見会のニュース」	2
10月	「運動会のニュース」「宿泊学習のニュース」「遠足のニュース」	6
11月	「おまつりのニュース」「三滝宿泊学習のニュース」「みかん狩りのニュース」	6
12月	「クリスマス会のニュース」	2
1月	「もちつきのニュース」	2
2月	「スキーのニュース」「学芸会のニュース」	4
3月	「ひなまつりのニュース」「お別れ会のニュース」	4
	題 材 数、16	32時間

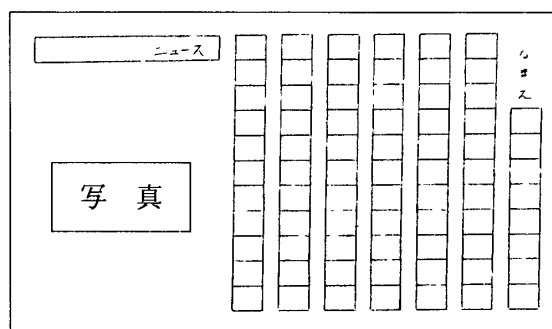
② 指導の方法

「書くこと」の指導方法を児童の「書くこと」の実態から具体的に次の段階に分けて指導を行うことにした。一人一人の児童が意欲を持って取り組めるように児童の状態から学習途中で指導方法を流動的に変えて指導を行った。表中の児童は、指導当初を示す。

指導期間

↑ 5月 ↓	↑ 9月 ↓	段階1：自分の活動話し、指導者が聴き取り作文用紙のマスの右に手本として文を書いておく。児童は、それを見ながら文を書いていく。児⑧児⑨
9月全		段階2：自分の活動話し、指導者が黒板に板書し、児童は板書を視写しながら文を書いていく。文は、1センテンスのみとして、発表、板書、視写を繰り返す。児⑦児⑩
⑧ ⑨ 児	11月	段階3：自分の活動話し、話した内容を指導者が全て板書しておく。児童は、板書を視写しながら文を書いていく。
⑦ ⑩ 児	10月 3月	段階4：自分の活動話し、それを文として書いていく。指導者は、時々声かけをして書くことを援助する。

尚、書くことに興味、意欲を持たせるため実際の学習場面の写真を提示した。また、単元により活動内容を録画したビデオを提示し導入とした。作文用紙は、右のものをを使用した。左の欄には、学習活動の写真を貼り、それを見ながら文を書いた。



(5) 自己評価の実態と自己評価力育成の手だて

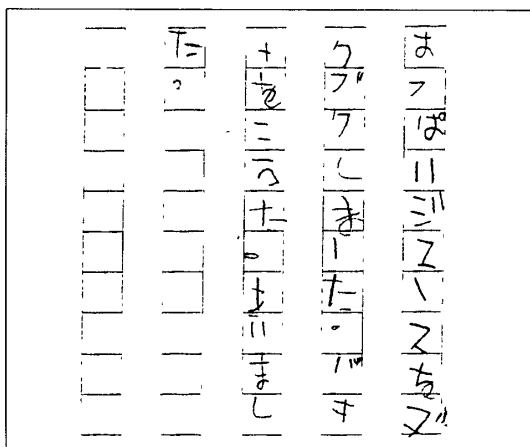
自己評価の実態		評価力の育成の手だて	児童
行動や活動をイメージできる。何らかの手段で表現できる。	学習のあと自分のした活動を発表し、他児の発表が聞ける。	時間経過がある中で写真や言葉のみによる活動の振り返りを援助し、評価する。	⑦⑧ ⑨⑩

(6) 指導の経過

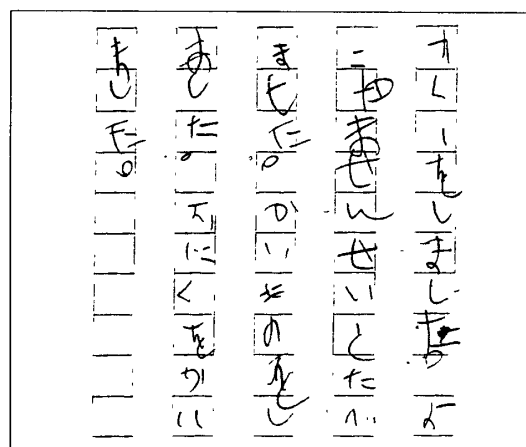
① 6月「宿泊学習のことを書こう」◎指導の方法 段階1～段階2

写真を見て書く学習の3回目である。写真を手がかりに宿泊学習であったことを思い出して書くことをねらった。4人とも写真に写っている行動を言葉で表現し、写真以外の宿泊学習での活動は発表が見られなかった。板書やノートの手本を視写するのに指導者の声かけが必要であった。

児⑧の作品



児⑩の作品



② 11月「おまつりのニュース」◎指導の方法 段階2

総合学習「おまつり」の一週間後の授業で書く題材として8回目である。指導方法では、4人と
も段階2に入っており、書く前の発表では、自分の活動を振り返り活発に発表してきている。また
板書の視写にも確実にできる様になっている。本授業の概要と考察を述べる。

11月の頃の読み書きに関する課題は、次の通りである。

実 態	課 題	児童
毎日の日記は一文が多いが、行事のあとと写真を見 ると自分の活動を話し、書こうとする意欲は高い。	自分の活動を話し、板書の視写で なく一人で文に書くことができる	⑦
休み中のこと、行事のあとと自分の活動を表情豊かな 話す。50音は書けるが、文を書くことは援助が必要	板書された自分の話した内容を声 かけ等の援助で視写ができる。	⑧
毎日の日記は、表情豊かな絵をそえて書いている。 行事のあとと自分からしたことを話すようになった。	自分の活動を積極的に話し、板書 された文を一人で視写できる。	⑨
日記は、誰と何をしたか詳しく書いてくる。書く意 欲はあるが、思いが走り脱字が見られる。	自分の活動を話し、書く内容を脱 字に気をつけ書くことができる。	⑩

ア 目標行動

目 標 行 動	児童
おまつりで楽しかったこと、頑張ったことを文章化して 話し、板書した文章を視写することができる。	⑧⑨
おまつりで楽しかったこと、頑張ったことを話しながら 文章にして書くことができる。	⑦⑩

イ 学習の展開

学 習 過 程	予想される活動	指 導 上 の 留 意 点	
		全 体	個 別
1 はじめの挨拶を する。		1 ○学習の始まりとし て毎時間行う。	1 ○号令はこの日の 日直が行う。
2 おまつりのこと を話し合う。 鬼の面 ビデオ 写 真	2 ○鬼の面をみて、み んなおまつりのこと をそれぞれ話すであ らう。(全児) ○ビデオを続けて見 たがるであろう。 (児⑧⑩)	2 ◎個人のおまつりの 発言を受けとめ、全 体に繰り返す話す。 ○おまつりを見れな かった人がいること に気づかせる。	2 ○発言の見られな い時は、声かけを して発言を促す。 (児⑧) ○第一日目のこと を話させる(児⑦ 二日目欠席)
3 おまつりのニュ ースを書く。 掲示板に掲示し よう したこと 楽し かったこと 頑 張ったこと	3 ○写真をみて自分の 活動を話すであらう (全児) ○写真にないことも 話すであらう。 (児⑧⑩) ○板書をよく見ない で書くであらう。 (児⑧⑨) ○要点のみの板書は 作文に時間がかかる であらう(児⑦⑩)	3 ○ニュースを掲示板 に掲示しようと話を 進めさせる。 ◎発言した内容を板 書して読み聞かせる。 ◎写真にないことも 話すことを奨励させ る。 ○楽しかったこと等 の発言を促す。 ○誤字、脱字のない ように机間巡視する	3 ○発言内容のすべ てを板書する。 (児⑧⑨) ○発言内容の要点 のみ板書する。 (児⑦⑩) ○必要に応じてプ リントに手本を書 く。(児⑧⑨) ○必要に応じて発 言内容を板書して 視写させる。 (児⑦⑩)
4 終わりの挨拶を する。		4 ○学習の終わりとし て位置づけ行う。	4 ○号令は、この日 の日直が行う。

・自己評価力の育成の手だては、◎で記す。

ウ 授業の考察

本授業は、書く指導を5月から始めて6ヶ月であり、題材としては、8回めに当たる。指導の中間点ということで授業のあと授業分析を行い、今後の課題を明らかにした。

本授業は、書きたいという意欲をより湧かせるため、児童が作った鬼の面を提示する、おまつりの日のビデオを見る、その後で写真を見て書くというように導入で多くのものを提示した。

さらに、目標行動に発表したことを板書を見ないで書くための前段階として、児⑦と児⑩は、発表した内容の要点のみ板書して（指導方法の段階4）文を続けて書くことを目標とした。

(ア) 導入方法について

鬼の面を見たり、ビデオを見ることにより、おまつりでどんなことがあったか、どんなことをしたかをどの児童も次々と思い出して発表することができた。なかには、立ち上がって鬼の面をかぶって学校を歩いたことを表現したり、神楽をしたことを思い出し、友だちと一緒に踊りだすことがみられた。導入で教材を複数用意することは、興味を起こすのには効果的であったが、写真をみて書く段階になった時には、発表しきったためか書こうとする意欲が薄れていた。

(イ) 目標行動について

児童が発表した内容の要点のみの板書を見て書いた文章は、次の通りである。

	発表内容	→	板書	→	ノート		発表内容	→	板書	→	ノート
児⑦	なおぼりにくまにはした		ぼくおに		ぼくおに	児⑩	しかおまぐましらつたをりで		かおぐら おまつり		ぐおまらまつりか

児⑦も児⑩も発表したことの要点から文を続けていくのにとまどったようだった。二人とも板書に書いてあることのみ書いて終わっている。要点のみ書かれていることから続きの文を書き始めるときには、一人一人に指導者が声かけによる援助をしながら書かせることが必要であった。

(ウ) 助詞の指導について

児童の発表を聞いていると、助詞「は」「に」「を」を付けずに主語と述語で表現していることが多い。本単元でもよく見られたので、文を表す段階で指導者が助詞をつけた文に直すことを指導していたが、書いた文は、その児童自身の表現から少し違ってきていると思われる。児童がその子らしさを生き生きと表現するためには、児童の言葉をそのまま文字で書かせていくこと。そのことが、児童の書きたいという意欲を持たせることにつながると考える。

③ 1月「もちつきのニュース」◎指導の方法 段階3

児⑦の作品

み	し	お	け	し	お
ん	た	も	て	ち	そ
た	の	ち	た	の	ち
し		た	た	あ	ち
た		あ	た	あ	き
ま		か		あ	べ
した		い		あ	マ
の		い		あ	マ
		い		あ	マ
		い		あ	マ

児⑩の作品

		み	お	お	お
		ん	ち	ち	ち
		た	の	の	の
		し			
		た			
		ま			
		した			
		の			

総合学習「もちつき」の一週間後に書いたもので、書く題材として12回目である。児童はとても活発に活動して楽しんだ学習である。4人とも写真に写っている自分の行動をただ「もちつきをしました」という表現だけでなく、児⑦のように加えて「きねでべたべたしました」と状況を詳しく発表して書いている。また、写真にないこと「ふくちゅうのともだちとしました」というようなことも発表して書いている児童もいた。

4. 考察

(1) 「書く力」の育成について

ア 話すこと

総合学習や行事にあとの発表では、児童は最初の頃、写真に写っている行動や物に関する発言が多かった。しかし、学習をすすめるうちに、写真にはない事柄を思い出して話したり、「またやりたい。」など学習を通して次への意欲も話すようになってきている。児童が写真をみて振り返っているとき、指導者は、どんな小さなことも聞き取りそれをみんなに知らせることにより、話せたという自信を持たせることが大切である。自分の行動を振りかえる時、写真やビデオは有効である。そして写真による振りかえりが身についてくると写真の手がかりを少なくすることも大切である。

イ 書くこと

児童は、最初の頃、板書や作文用紙の手本を見て書いているのに間違い字があったりと視写することがむつかしかった。しかし、友達が、板書を視写しているのを見て「ぼくもかく」と意欲を持って書くようになり、10月頃になるとどの児童も板書をよく見て視写することが出来るようになった。4人の発表内容を板書する時は、児童の体操帽子の色（赤、白、青、緑）のチョークで板書すると自分の色と言ってとても喜んで書いていた。チョークの色分けは、自分の文章を確かめながら書いていくのに大変効果的であった。書く指導の方法において、段階を追っていくが、その日の状態によって板書を全然みなかったりすることがあり、ノートに手本を書くことがあった。その日の児童の状態や気持ちを考えながら指導していくことが大切である。

ウ 題材について

総合学習や行事は、児童にとってとても楽しみにしている学習が多い、また児童が主体的に活動する場面が多く、そのことが事後学習の振り返りを活発にしていっていったものとする。児童の生活にとって身近な題材をこれからも取り上げていきたい。

エ 文の表記について

本学級の文の表記の指導では、正しい字を書く指導は大切であるが、助詞などの表記に関する指導は、文章を書くことが積極的になった時でいいのではないかと考える。「もちつきのニュース」に見られるように児童は、児童自身の言葉をそのまま文にして生き生きと表現している。児童自身の言葉による文章は、その子らしさを表現することであり、児童の言葉を大切にしていきたい。

(2) 自己評価力の育成について

児童は、学習活動の振り返りを「もちつき」の児⑦のように細かな活動まで見つめて書くようになっている。また、スキーを休んだ児⑦は、「やすんだこと」と題してニュースを書いた時、他の児童に休んで何をしたら知らせたいと張り切って次のように書いた。

この日は、他の児童の指導をしていると児⑦は、いつものまにか、自分から作文用紙に書いていった。

「ファミコンをしました」といつも日記に書いている児童⑦が、こんなにしっかりと文章を書いてくるようになった。児童は、しっかりと行動をみつめ振り返っており、生活のなかに新しいことを取り入れており、自己が高まってきていると考える。

ぼくは びょういんに いきました ちゅうしゃを うちました あたたかい うどんをたべました。
--